

ボ刺激の効果を脳波と自律神経活動・皮膚温で定量評価し、患者の説明に活用したいと考える。

(n = 3, mean ± SE)	対照(SGB前)	SGB 5 分後
α波(%)	8.3 ± 2.5	35.7 ± 6.9
δ波(%)	64.9 ± 6.1	30.3 ± 4.6
交感神経活動(LF)	594.6 ± 239.2	551.0 ± 347.8
患側皮膚温(°C)	34.4 ± 0.4	35.5 ± 0.3

22. う蝕診断におけるDIAGNOdent™の応用に関する臨床的研究

—第2報 乳歯と永久歯との比較—

○亀廣 文, 丹下 貴司, 齊藤 正人, 野呂 大輔*, 桜井 有子, 千秋 宜之, 五十嵐清治
(北海道医療大学歯学部小児歯科学講座, *北海道医療大学医療科学センター医科歯科クリニック)

【目的】近年, う蝕予防に対する関心の高まりとともに, う蝕診断法の重要性が増してきている。その中で非破壊的う蝕診断法としてDIAGNOdent (KaVo社) が応用され始めているが, 本装置を用いた乳歯う蝕の診断に関する報告は永久歯に比べ少ない。今回, 我々はDIAGNOdentを応用した乳歯と幼若永久歯のう蝕診断法について検討したので報告する。

【対象及び方法】本学附属病院小児歯科外来を受診した患児 (27名) の乳臼歯および幼若永久歯小窩裂溝部を測定部位とした。視診及びエックス線診査により, 健全歯およびC 1～C 2と臨床的に診断した乳臼歯 (59歯) 幼若永久歯 (39歯) に対し, DIAGNOdentを用いて測定を行った。測定に際し, 患歯をロビンソンブラシで清掃し, 簡易防湿または, ラバーダム防湿下において5回測定し

平均値を求め, 統計学的検討を行った。

【結果】

臨床診断	乳歯	(n)	永久歯	(n)
健全歯	3.86 ± 0.46 ^a	24	4.87 ± 0.81 ^c	16
C 1	19.27 ± 2.99 ^{a,b}	9	21.60 ± 3.33 ^{c,d}	15
C 2	41.14 ± 4.18 ^b	26	54.73 ± 5.01 ^d	8

(平均値 ± 標準偏差)

a～dの同一文字間: 有意差あり (p < 0.05)

【考察】乳歯, 幼若永久歯における, DIAGNOdentの値は, 健全歯, C 1, C 2共に永久歯でやや高い値を示した。う窩の存在を示すボーダー値は乳歯で16前後, 永久歯では18前後と考えられた。この相違は歯質の厚さや有機質量などが要因として考えられるが, 今後症例数を増やし, さらに詳細に検討すべきと考えられた。

23. ハイブリッド型硬質レジンを用いた臼歯部インレー修復について

○黒田 慎一*, 荊木 裕司*, 尾立 達治*, 柿崎 税**, 松田 浩一*
(*北海道医療大学歯学部歯科保存学第二講座 **北海道医療大学歯学部附属病院技工研修科)

【目的】保存修復学領域において審美性修復材料として代表的なものにコンポジットレジンがあるが, 強度, 耐磨耗性などの点から前歯または臼歯部の比較的小規模な齲蝕に対して用いられている。臼歯部の広範な欠損修復に対しては従来より金属インレーが適応されてきた。しかし近年, 国民の審美性への要求と認識が高まり, 臼歯部においても歯冠色の材料を望むようになり, 材料の開発もさかんに行われるようになった。最近, 硬質ハイブリッドコンポジットレジン材料を利用したインレー修復が臼歯部審美修復の選択肢のひとつとして臨床報告がなされは始めている。当講座でも臨床検討をこれまでにおこ

なっているが, 今回はその代表症例を提示するとともに短期の術後経過について報告する。

【症例】本学歯学部附属病院来院患者について臼歯部審美的修復を希望し, 処置の了承が得られたものにハイブリッド材料による間接法インレー修復を行なった (18症例)。窩洞形成は鋳造インレー修復よりも窩洞を深く (約2 mm) し, 隅角は鈍化させた。隣接面窩洞はBOX型とし, 窩縁部は咬合面ではバットジョイント, 歯肉側ではショルダーまたはディープシャンファーとした。窩洞形成後通法により印象採得, 作業模型を作製しインレー体を完成させた。使用材料はエステニア, エブリコード (ク